〈経営研究　第11巻　第1号　平成9年7月〉

アメリカ・インディアン高校生の中途退学問題について〔中〕

伊　藤　　聰

〈キー・ワード〉
- アメリカ・インディアン（American Indians）
- 先住アメリカ人（Native Americans）
- 中途退学，中途退学者（Dropout）
- 全寮制学校（Boarding Schools）
- 民族同化（Assimilation）
- 民族自決（Self-determination）
- 二言語併用・二文化併立教育（Bi-lingual-bi-cultural Education）

目　　次

はじめに
I.　インディアン教育の歴史
II.　インディアン高校生の中途退学に関する研究論文
　［本項(4)まで前号，(5)～(6)まで本号］
III.　研究論文総括(1)── インディアン高校生の中途退学率について
IV.　研究論文総括(2)── インディアン高校生の中途退学をめぐる諸要因について
おわりに

(5) Karen Swisher and Michelle Hoisch, "Dropping Out Among American Indians and Alaska Natives: A Review of Studies", Vol.31, No.2, January 1992.

［研究目的］

アリゾナ州立大学インディアン教育センターにより収集された過去の文献を総合的に再検討し，まとめること。

［退学率調査を困難にする要素］

1．３つの教育システム（連邦，州，私立）のデータ記録の方法や退学率算出方法が異なるために，統一的な中途退学の状況を導き出せない。

2．転学者の追跡が難しく，転学者を退学者と捉える結果になることがある。逆に，退学者を転学者と捉える場合もありうる。

3．各調査研究の方法論の違い，例えば，「退学」の定義，「アメリカ・インディアン，アラスカ先住民」の定義，退学率の算出方法などの違いにより，各研究の比較が困難である。

［調査結果――退学率など］

1．Kutsche（1964）

ノース・カロライナ州のインディアン局立のチェロキー高校と，学生のほとんどが非インディアンである近隣の２つの公立高校における退学率を比較調査したものである。退学率は前者が17.9％であるのに対し，後者は８％と7.7％であった。

中途退学の理由については何も報告されていない。

比較対象となった公立高校に在籍するであろうインディアン学生に関するデータを示していないことから，この研究はインディアンと非インディアンの比較というよりは，２つの異なる学校システムの比較であるといえる，と著者は指摘している。

2．Coombs（1970）

2つの調査研究が紹介されている。両者とも一定期間にわたって追跡調査したもので，信頼できるものであるとしている。

1つはSelinger（1968）の調査研究である。対象は北西部と平原地帯の数部族の8年生であり，1962年から1967年の卒業まで調査された。得られたアメリカ・インディアンとアラスカ先住民の学生の退学率は，低いものでオレゴン州の28.6%からサウス・ダコタ州の57.6%という高い数字まで多岐にわたっている。

他の調査は，OwensとBassによるもので，南西部と高原地帯の数部族の8年生を，1962年から1967年の卒業まで追跡調査している。対象学生1,217名の平均退学率は38.7%であった。

これら2つの調査の中で，学校システム別の比較調査と転学者の退学率調査も実施され，次のような結果が得られた。

イ．公立高校在学のインディアンとアラスカ先住民高校生は，インディアン局立の高校に在籍する学生より退学する割合が高い。（例えば，ニュー・メキシコ州では，インディアン局立の学校の学生の退学率が21.7%であるのに対し，公立校の学生の退学率は約30%である。）

ロ．インディアン局立校から公立校への転学者は，公立校からインディアン局立校への転学者より退学する割合が高い。（例えば，アリゾナ州では，前者の退学率が約14%であるのに比し，後者の退学率は2.8%である。）

ハ．インディアン局立校から公立校への転学者の退学率は，どちらかのシステムに在籍し続ける学生の退学率より低い。

3．Horton and Annalora（1974）

この調査は，秋学期のみ実施されたこと，また転学者を退学者とした点で，Swisherらはその研究価値を疑問視しており，その内容についてほとんど言及していない。

4．Latham（1985）

＊本稿II-(2)参照

5．Platero，Brandt，Witherspoon，and Wong（1986）

ナヴァホ居留地周辺に位置し，学生の大部分がナヴァホである公立校，契約校，インディアン局立校，私立校のナヴァホ学生が調査された。データは，101校の学生個人記録，86校の学校状況調査，そして670名の滞学者と219名の退学者の調査結果である。導き出された退学率は31％である。

6．Dehyle（1989）

ナヴァホ族とユート族の高校退学者を対象とした4年間にわたる調査研究である。1984，1985，1986，1987，1988年度の5クラスが対象となったが，それぞれの退学率は，31，29，31，40，50％である。

次の点も明らかにされた。

イ．対象学生の18％もが，12年間在籍しながらまだなお卒業できない。

ロ．対象学生の半分以上が12年生時に退学している。しかし，高校卒業資格を得たいという強い気持を持っている。

ハ．非常に多くの卒業生（20％）が留年や特別講座受講などによりやっと卒業している。

7．National Education Association（1989）

Swisherらは，この研究の具体的内容やその結果について特に言及していない。調査に関わる次のような問題点を指摘している。

イ．公立，私立，インディアン局立の3つのシステムを越えた調査研究がほとんどなされていない。なされたとしても地域的なものに限定される。

ロ．公立校を監督する個々の州が，退学に関してコミュニケーションや情報交換をするシステムを確立していない。

ハ．州によって退学率算出の方法が異なっていたり，時には比較不可能な

場合がある。したがって，全国レベルでの退学率を算出することができない。

8．インディアン局（1991）

局立の学校に対して郵便と電話により，入学と中途退学に関する統計および転学に関する情報が求められた。9–12年生の退学率は25％と算出された。

各学校から送付された情報が検証されることなく受け入れられたため，中途退学者数の計算が同じ方法で行なわれたかどうかをチェックできなかったことは１つの限界である，とSwisherらは指摘している。

［調査結果 ── 退学の理由および要素］

中途退学に関する調査研究の中には，退学の理由や退学と相関関係にある要素について調査したものも多い。Swisherらは，これらの研究が明らかにした退学の理由などについて検討を加えている。

1．Wax（1967）

一般的には退学の理由はほとんど同じであるとされる。つまり，退学者は学校が嫌いであり，学校を拒否すると考えられている。しかし，Waxによると，退学者の置かれた状況はさまざまであり，退学の理由も異なる。彼等は決して退学したいと思ったのではなく，「退学させられた」と感じている。学業は特に問題ではなく，いじめなどの理由で学校は寂しくまた耐え難い場所になっている。

2．Coladarci（1983）

＊本稿 II-(1) 参照

3．Platero，et．al．（1986）

学生の挙げた退学の理由は次の５つである。

イ．学校は退屈であること

ロ．他の学生との問題

ハ．長期欠席による留年

ニ．妊娠およびそれによる長期欠席

ホ．問題行動（家庭および学校）

一方，教員の想像に過ぎないかもしれないが，教員が指摘する退学の理由は次のとうりである。

イ．家族の励ましの欠如

ロ．学業問題

ハ．家庭問題

以上で判断できるように，教員は学生の状況を理解しているとはいえない。

Platero らによれば，ナヴァホ学生の退学にかかわる興味深い側面の1つは，彼等は決して学業ないし教育を諦めてはいないということである。このことは次のような事実に示されている。

＊全退学者中46％がいつか復学し，卒業したいと考えている。

＊45.1％が「たぶん」いつか復学し，卒業したいと考えている。

＊わずか8.8％が復学ないし卒業する希望を持っていないだけである。

4．Dehyle（1989）

前掲の Coladarci の挙げた退学理由に，次の諸点をより多い順に追加している。

＊家庭問題

＊授業の難しさ

＊教員からの支援の欠如

＊読みの難しさ

＊両親からの励ましの欠如

＊教員の無関心

＊家庭における労働の必要性

＊学校への距離

＊教員との不適合

＊妊娠

＊インディアンとしての学生にとって学校は重要ではないと認識されること

Dehyleはさらに，人種的な緊張関係も退学の原因になりうるとしている。学生は教員や地域の住民からばかりでなく，非インディアンの同級生からも敵対行為を向けられた経験を報告している。

この研究はまた次の点も示唆している。つまり，いわゆるできる学生は，「白人」社会で成功しようとしているとして，地域社会のメンバーから嘲笑されることが多い。

5．Swisher，et．al．(1991)

インディアン人口が最も多い州の1つであるニュー・メキシコ州から提供された退学理由のリストを紹介している。挙げられた理由の大部分が学生により表明されたものである。対象学生は7-12年生である。

理　　由	男子(%)	女子(%)
強制退学	25.7	17.8
興味の喪失	23.4	20.7
転学	12.5	16.9
妊娠	0.0	12.4
学校不適応	9.1	5.5
再入学の失敗	4.1	5.5
学業不振	4.4	3.4
卒業同等資格取得の準備	4.0	2.5
両親の要望	3.5	3.0
子供の世話	0.0	3.0
停学	2.4	1.5
就職	1.5	1.0
家出	0.6	1.0
結婚	0.3	1.0
病気	0.8	0.7
その他，不詳	7.9	4.3

このリストの基になったニュー・メキシコ州の調査は他のあらゆる民族グループをも対象としているが，次の点に注意しておく必要がある。つまり，

インディアン学生の退学理由で最も一般的な「強制退学」が，他のグループの理由の上位には見られないことである。各地区当局がインディアン学生を何らかの理由で退学させようとするから，この州ではインディアン学生が他のどのグループよりも退学する傾向が強い，とSwisherらは指摘している。

教職員らの間にインディアンに対する差別意識がいぜんとして残っているのではないか。教育現場における人種差別や偏見については，それを排除するための調査や研究が，インディアン固有の文化や歴史の正しい認識とともに深められなければならないであろう。次に取り扱うDehyleがやや詳しくこの点に言及している。正面から特にインディアンに対する差別や偏見を教育との関わりで取り上げる研究がさらに必要である。

6．アリゾナ州立大学インディアン教育センター（1992）

中途退学の理由や退学に結び付くと思われる要素について，インディアン局立校の教職員に対し，アンケートおよび電話により質問が行なわれた。得られた回答は次のとうりである。

＊両親が子供の出席を促したり確認したりすることができないこと
＊学生の教育に対する関わりが少ないこと
＊妊娠
＊家事の手伝い
＊教育に対する意欲が小さいこと
＊薬物乱用（学生，両親とも）
＊学業不振
＊勉学技術が低いこと
＊外部からの障害［具体的には不明］
＊インディアン局立の学校システムへの不信
＊インディアン局立校における予算不足
＊転学に関する政策の欠如（学生のニーズに応えることが困難）

これらは教職員からの意見にすぎず，同時に学生本人やその両親からも意見を聞く必要があることは当然である。しかし，インディアン局の組織上の欠陥に光を当てたことは意義がある，とSwisherらは指摘している。

［調査結果 ── 転学と退学の関係について］

転学は大きな問題である。一部の地域では退学より大きな問題となっている。ある居留地では，転学率は退学率より高く，学業に悪い影響を及ぼしていると考えられている。

転学と退学との関係については，２つの相反する調査結果がある。１つは卒業者よりも退学者のほうが転学が多いというもの（Eberhard，1988），もう１つは，ナヴァホ学生の場合は卒業者のほうが退学者よりも転学が多い（Platero，et．al．，1986）というものである。

転学がより良い勉学条件を求めてのものか，あるいは単なる逃避か，それは今後の研究に委ねられることになる。家族の状況も考慮されねばならないであろう。

Swisherらは，他に小規模な（被験者数が少ないなど）調査研究も紹介している。「伝統的であることはマイナス要素ではないと思われる」など，興味深い結果が出されているが，ここでは取り上げない。一定充実した規模での追試が必要である。

過去の研究を総合的に検討したSwisher and Hoischの研究は，アメリカ・インディアンとアラスカ先住民の中途退学を取り巻く状況を一定明らかにした。しかし，くっきりとした全体像が浮かび上がってこない。その理由は，各研究がそれぞれ異なった方法で実施されているために比較が困難なことであろう。Swisherらがいうように，今後は中途退学調査のための共通の基準が必要となってくると考えられる。大規模な全国的調査も期待されるところである。

(6) Donna Dehyle, "Constructing Failure and Maintaining Cultural Identity: Navajo and Ute School Leavers", Vol.31, No.2, January 1992.

［研究目的］

地方の居留地のある地域社会におけるナヴァホ族とユート族の若者の次のような諸問題を分析すること。つまり，退学，人種関係，学業成績，学校・地域社会間の文化変容である。文化面の要素とは，１）地域社会と学校における人種的，経済的関係，２）家庭の不干渉主義と早成主義による子育て，３）文化維持および抵抗，である。

［調査方法］

次の４つのデータに基づいて調査，分析された。つまり，１）学校の記録，２）人類学的観察記録および文献，３）退学者へのインタビュー，４）アンケート，である。

２つの学校，ボーダー高校（BHS，仮名－以下地名と高校名は仮名）とナヴァホ高校（NHS）から629名が対象となった。これは1984年度から1989年度までの６つのグループから構成されている。７年間にわたり追跡調査された。

アンケートはColadarci（1983，前掲）が開発したものが使用された。合計168名の退学者がインタビューを受け，アンケートに答えた。約半数がナヴァホ族居留地の端に在る小地域社会ボーダーの出身であり，２分の１がナヴァホ族居留地内の最も伝統的な[1]ナヴァホ共同体であるナヴァホ・メサ，残りの２分の１がその近隣のユート族居留地の出身である。

［調査結果］

１．退学率など

＊６グループの平均退学率は34％である。

＊この中，55％が12年生の時に退学した。

＊彼等は卒業資格を得たいという強い希望を持っていた。

＊卒業者の中，10％が留年あるいは特別講座受講などにより卒業している。

＊NHS（99％がインディアン学生）では，卒業者63％，退学者28％，不詳９％である。

＊BHS（47％がインディアン学生）では，卒業者55％，退学者40％，不詳５％である。

2．退学理由（NHSの公式記録。カギカッコは学校の用語であることを示す）

＊37％が「問題行動」のため退学を命じられたか，「学校嫌悪」により退学した。

＊34％が，家族を援助するために家庭内あるいは外部で働くよう両親が希望したため退学した。

＊４分の１が「理由不詳」である。

＊次のような理由で退学した学生は存在しない。

学業問題

結婚

妊娠

教職員あるいは級友との不和

この点を解釈する時には注意を要する，とDehyleはいう。学生はその理由を告げたくない，あるいはその必要がないと考えるからである。

3．退学理由（学生へのアンケートによる）

理　　由	ナヴァホ／ユート (N=168) (%)	ユート (N=42) (%)	ナヴァホ・メサ (N=42) (%)
教師の無関心	48	78	12
教師の支援欠如	53	88	26
教師との不適合	43	66	12
学校は人生に重要ではない	46	64	36
学校はインディアンにとって重要ではない	36	52	19
両親の支援の欠如	49	78	50
家庭問題	66	92	45
仕事の必要性	47	66	62
授業が難しい	65	78	57
読みが難しい	53	66	50
妊娠	37	46	36
学校での忌避感	43	83	14

4．学生と教師の間の関係

＊両者の間のマイナスの関係は，退学を決心する上で重要な要素である。

＊ナヴァホとユートの学生の約半分が，教師は彼等に対して無関心であると感じている。

＊勉学についても援助してくれないと訴えている。

＊一方，ナヴァホ・メサのような伝統的な地域の学生は，その逆のことを感じている。

＊教師が無関心であるという学生の認識は，学校がインディアン文化と結び付いていないという印象と相関関係がある。

＊学校での不適合の対象は，教師，他の学生，学校当局であり，同等程度に存在する。

＊ナヴァホ・メサを除く全ての地域で，大多数の学生がトラブルを経験している。

＊若い学生のほうがトラブルの経験が多い。

＊学生は教師を信頼していない。彼等のことを気にかけている良い教師でさえ信頼しない。それは，教師はその地域のナヴァホ社会の経済，政治，宗教を支配している白人社会の一員だからである。

5．若者と白人地域社会の関係 ── 組織化された人種差別主義

＊ここで説明されている事柄は，人種差別，偏見，無知に関するこれまでの一般的な考えに単に基づくのではなく，むしろ，白人がこの地域社会の政治的，経済的支配を確立し，維持するために使用してきた「同化」という作られた規範である。

＊インディアンにとって「成功」への唯一の道は，「非インディアン」になることであった。多くのインディアンの若者はそれを拒否した。

＊1800年代にモルモン教徒達がこの地域に到着して，ナヴァホとユートを植民化した。最初からモルモン教徒達はインディアンの政治的，文化的主権に対する要求を退けていた。

＊白人は，白人の価値感や宗教を代表する制度を確立した。インディアンは成功するためには白人の行動基準に従う必要があった。このことは今日でも事実である。

＊学校は特に文化的同化の道具となった。

＊ナヴァホは自らの言語，宗教，価値感，信条を忘れなければならなかった。このことも過去100年間ほとんど変化することはなかった。

＊人種差別主義は，この地域社会における白人の権力と支配を維持するために必要な社会構造のための理論的根拠である。

＊この地域におけるナヴァホとユートの人口割合は47％であるが，経済的には貧しい。

＊福祉に頼る人々の約90％がナヴァホかユートである。

＊ナヴァホとユートの失業率は68％であり，それは白人の３倍である。

＊教育長，４つの高校の長のすべて，５つの小学校の長の中４人，コミュニティ・カレッジの管理者のすべてがモルモン教徒である。

＊ナヴァホの教員は15％にすぎず，その中半分以上がモルモン教に改宗している。

＊多くの白人はつぎのように考えている。つまり，インディアンは怠惰で，やる気がなく，信頼できない労働者である，また，インディアンは飲酒問題を抱えており，無責任で面倒見の悪い親である。

＊人種間の問題は支配的な宗教であるモルモン教とそれ以外の宗教の間の関係によりさらに複雑となっていた。白人の大多数はモルモンであり，ナヴァホの大多数は伝統宗教か先住アメリカ人教会[(2)]のメンバーである。

＊モルモンの考えからすると，ナヴァホを改宗させることが彼等の「使命」である。

＊改宗は，学校，家庭，スポーツ・チーム，ボーイ・スカウト，ガール・スカウトで行なわれた。ナヴァホの両親はそれを恨みに思っていた。また，子供達の「ナヴァホらしさ」を否定しようとする教会に子供を奪われると恐れている。

＊政治的権力は白人モルモン教徒の手中にある。限定された政治的，経済的機会の定型化が，学校における成功についての認識感を歪めている。一部の若者にとっては，退学するということはすでに彼等を拒否してきたシステムを拒絶するということの表明である。

＊NHSを退学した若者の３分の１以上が，教師や当局との不適合や争いを理由に退学している。

６．勉学上の問題 ── カリキュラムと読解力［「英語の読解力」－筆者注］

＊ナヴァホとユートの退学者の３分の２が勉強は難しいと言う。

＊勉強の難しさは読みの難しさと強く結び付いている。

＊全グループの半分以上である53％が，読みの難しさが学校における彼等の問題につながっていると感じている。

＊この地域の平均的なインディアンの高校卒業生の読解力は，７年生のレ

ベルに過ぎない。

＊退学者の大部分の読解力は，全国平均より少なくとも6年遅れている。

＊学生の読解力の無さが，内容に興味が無く高い読解力を必要とする教科書とあいまって，次第に退屈さが増大し，退学へと至る。

＊ナヴァホの約半数とユートの約3分の2が，学校は彼等の人生にとって重要ではないと感じている。

＊全グループの3分の1が，学校はインディアンとして重要なことを教えてくれないと思っている。

＊年配のグループの約半数（46%）が，学校はインディアンとして重要なことを教えてくれないと指摘しているが，一方，若年のグループでは4分の1に過ぎない。

＊最も「不満足」な地域社会であるユートの半数が，学校はインディアンとして重要なことを教えてくれないと言う。

＊一方，最も伝統的な社会であるナヴァホ・メサでは，80%以上がこのことを退学に至る要素であるとは捉えていない。

＊学生の人生とは結び付いていないと考えられているカリキュラムは，退学の重要な理由であった。

＊そのカリキュラムは基礎技能，補習，職業教育に重点を置いている。

＊BHSでは，インディアン学生は上級コースに登録するが，すぐにやめることが多い。そのコースにはインディアンがほとんどいないからである。

7．ナヴァホの卒業者と退学者 ── 最低限の雇用状況

＊インディアンの若者に開かれた職業は，高校卒業資格を必要としない。

＊公務員や上級の職業の90%以上が白人によって占められている。インディアンは8%に過ぎない。

＊インディアンの雇用は，サービス，修理，建築などの労働者や，助手としてである。教職員はナヴァホに専門的な職業に就くようには勧めない。

それは「白人の職業」であり，ナヴァホの能力を超えているからであるとする。

＊「ナヴァホの職業」は半熟練労働であり，教育経験を必要とするものはきわめて少ない。

＊卒業者と中途退学者の両方を含む1,030人の青年の中，21％が就職しており，29.5％が失業中，18.5％が在学中，31％が詳細不明であった。

＊卒業者624名の中，31％が就職しており，21％が失業中，28％が在学中，20％が詳細不明であった。

＊退学者404名の中，わずか11％が就職しているだけで，38％が失業中，９％が在学中，42％が詳細不明であった。

＊高校卒業者の就職する機会は，卒業していない者の２倍あった。

＊高校卒業者とそうでない者の仕事の種類にほとんど違いはなかった。

＊仕事の種類はほとんどがサービス産業の仕事であった。それらの特徴は，各種手当のない低賃金で，季節的で，きわめて一時的なものであるということである。

＊このような仕事に就いている両親や卒業した仲間を目にすることによって，多くの退学者は卒業することの意義を見い出せない。

＊学校や地域社会の中に組み込まれている政治的，経済的，社会的制約が，若者の人生の枠組みを規定している。

8．若者と家族の関係

＊ナヴァホの半数とユートの４分の３以上（78％）が，親の励ましの欠如は退学を決心するうえで１つの要素となると言う。

＊しかしながら，全グループの３分の２が，両親は彼等に学校に残ってもらいたいと強く望んでいる，と述べている。

＊両親は子供達に学校へ行ってもらいたいと思っているとされるが，その一方，十分な「励まし」(3) を与えていないと評される。このことは，両親が教師や学校といかに接触するかということと関係があると思われる。

そして，インディアンの両親は学校や子供に対してほとんど力を持っていないし，彼等との効果的なコミュニケーションもない。

＊学校においてナヴァホと白人の間の文化と価値感の相違は明らかである。ナヴァホにとっては，子供の早期の自立と子供への不干渉が望まれる。一方，白人の間では，子供や青年に対する大人の監督が強い価値観を持つ。

＊ナヴァホ文化においては，２つの明らかに相反する考え方が機能している。財産や行動に関しては，個人の自律が主張されるが，同時に，グループの同意と協調が望まれる。

＊若いナヴァホは，学校や白人社会では未成熟な青年あるいはティーン・エイジャーと捉えられるが，両親からは大人として見られる。

＊ナヴァホの親は退学を決心した子供に対し干渉しない。この点を，白人の親や教員は「支援不足」または「無関心」と解釈する。

＊ナヴァホはいわゆる「できる子」をからかうことがある。からかいあるいはいじめは，ナヴァホの伝統的な社会的抑制の一形式である。

9．文化維持と抵抗

＊多くの両親にとって，家族と部族の世界は学校同様子供のために重要であった。

＊両親は子供の中に「ナヴァホ」としてのアイデンティティーを確保したいと考えていた。

＊これらのことにより，子供は家族や社会関係の豊かさを知るが，一方，それが学校では１つの重荷となった。

＊一部のできる学生に対する仲間や地域社会からの圧力は実在した。

＊このことに対する１つの解釈は，それは文化的純粋性やグループの完全性を維持したいという欲求を表明するための１つの手段である，ということである。

＊別の見方は，このような圧力は，できる子供は家族や地域社会を離れて，

「外の」世界へ行ってしまうという恐れが基になっている，ということである。

＊この恐れは，過去の実際の経験や現在の経済的状況が背景となっている。

＊歴史的に，ナヴァホの両親は学校に反対することが多かったが，それは子供に勉強して欲しくないからではなく，家の仕事（羊の世話，幼い弟や妹の面倒など）を手伝って欲しいという経済的な理由からであった。このようなケースは，最も伝統的な地域であるナヴァホ・メサでは顕著であり，退学者の半数が退学の理由として掲げている。

＊ナヴァホの３分の２とユートの92％が，家庭内におけるアルコールや麻薬の乱用，大家族，両親の喧嘩，失業を問題として挙げている。

＊妊娠や結婚は，女子退学者の約半数が退学の主な理由としている。ナヴァホ社会では，若い母親を祝福し，援助する。一旦若い女性が母親になると，彼女の役割は大人のものと変化し，彼女の人生は学校という現在の必要性を超えることになる。このことを白人教職員は理解できない。

＊ナヴァホは居留地における生活を生き生きとし，自立した，社会的，宗教的社会であると考えている。逆に，白人はこれを孤立と誤解し，「文化的真空状態」としか見ない。

このDehyleの調査研究は以下の点からかなり充実したものといえる。

1）７年間というかなり長期に亘る地道なものであること。

2）学校側，学生側の両方を調査対象としたこと。

3）被験者の数が多いこと。

4）地域社会や学校における人種的，経済的関係を取り上げたこと。

5）文化の相違に焦点を当てたこと。

逆に，欠点を挙げるとすると，意見を聴取した教職員や両親の数が少なく，また，組織的ではないということであろう。

（未　完）

注

(1) 「伝統的」とは，伝統的な文化を維持しているということである。逆にいえば，白人文化の影響を受けていないということである。

(2) 「先住アメリカ人教会」とは，キリスト教や白人文化への同化に抵抗するために，部族の違いを超えて組織化された宗教である。ペヨーテと呼ばれるサボテンの幻覚効果を利用する。それにより，「ペヨーテ教」とも称される。全インディアン部族の道徳的和合を強調し，また，多くの部族宗教の信条を統合させた，といわれている。

(3) 原文は“encouragement”と引用符付きとなっている。次の段で説明されているように，白人文化とナヴァホ文化の大きな違いが理解されないと，問題の本質が見えにくくなる可能性を示唆していると思われる。